

# 須恵器出現期の土師器

## —煮沸用土器を中心に—

中 西 克 宏

### I はじめに

東大阪市文化財協会では、原則として毎月一回研究会を開催している。本稿は、昭和58年10月14日に発表した内容を紹介することにした。発表の主題は、主に5世紀中頃の畿内地域における須恵器出現期前後の土器を中心に、様々な観点から、これらの土器の特徴を引き出し、各土器間に認められる相互関連について検討し、さらにその背景について考えてみた。

まず、はじめに須恵器出現期前後の土器研究について振り返ってみたい。この時間の土師器について最初に注目し報告したのは、1956年の坪井清足による『高島・王泊遺跡』である。<sup>(1)</sup>このなかで坪井は、Ⅰ層からⅥ層出土土器を取り上げ、Ⅴ層出土土器を近畿地方の布留式土器に併行するものにあて、最も純粋な形で出土したものとして小若江北遺跡の資料を提示した。さらに、Ⅲ層出土土器は、後期の横穴式石室古墳から多量に出土する須恵器を伴うが、最古の須恵器とは考えられず、Ⅲ層下層にあたるⅣ層において、古い須恵器がすでに出現している可能性を示唆している。1961年横山浩一は、近畿・中国地方の土師器を酒津式・小若江Ⅰ式・小若江Ⅱ式に細分している。そして、小若江Ⅰ式を小若江北遺跡出土品を標識とし、須恵器伝来以前の様式とした。また、小若江Ⅱ式については、小若江南遺跡出土品を標識とし、須恵器を伴うとしている。さらに、土師器のなかに、新たな器種として、甗・カマドが出現するという指摘を加えている。<sup>(2)</sup>翌年、田中琢・佐原真らは、船橋遺跡のO・K・I地区等の各層出土土器を対象とした報告をおこなった。<sup>(3)</sup>この報告は、古墳時代初頭から6世紀前半にわたる、土師器・須恵器の編年案を示しており、小若江北遺跡出土土器に後続するものとして0Ⅰ～0Ⅴを設定し、0Ⅱに須恵器が伴うとした。そして、「この時点で土師器にも甗等の新たな器種が出現し、古い要素の上に新しい要素が重り合っている。」と述べている。また、「0Ⅲは、従来の小若江Ⅱ式・王泊Ⅴ層に対応し、器形の組み合わせに変化を生じた。さらに0Ⅴまでに須恵器は貯蔵用、土師器は煮沸用が主たる位置を占めるようになる。」とし、今日における須恵器出現期前後の土師器研究の基礎をなした。その後、須恵器出現以前の古式土師器及び、須恵器の研究は著しい進歩をみせた。このなかで注目すべき研究の1つに、木下正司・安達厚三の布留式土器の細分案を示した論考がある。<sup>(4)</sup>この論考では、「上ノ井手遺跡SE03上層出土土器群は、船橋遺跡0Ⅰと類似するものの、0Ⅰには須恵器を共伴する時期に盛行する要素が強い。」としており、甗の特徴として、口縁端部の肥厚が長く内傾するものが圧倒的に多く、体部は胴の張りの乏しいや

や長手の球形を呈するとしている。また、このような長胴の甕は、須恵器出現期以降の体部が著しく発達する新しい甕に受け継がれてゆくとも考えられている。<sup>(5)</sup>一方、須恵器出現後の土師器研究は、『船橋』以降、長期にわたり、大きな成果は得られなかった。このような停滞的な研究動向のなかで、1979年、原口正三は、「須恵器の登場によって土師器は、煮沸用分野に集中し、本来組み合わせる煮炊き具や把手のついた器や須恵器の形とよく似た杯・鉢の類が現われ、5世紀段階に須恵器の流入と共に赤焼きの新たな器も彼の地からもたらされた。」と述べ、須恵器出現後の土師器の系譜関係について注目すべき見解を提示した。<sup>(6)</sup>また、1980年、阿部嗣治は古くから注目されてきた漢式系土器をあらためて集成し、須恵器出現期に、土師器とは別系統の赤焼きの土器群の存在することを再認識させ、以後この種の土器群が各地で確認されるようになった。<sup>(7)</sup>

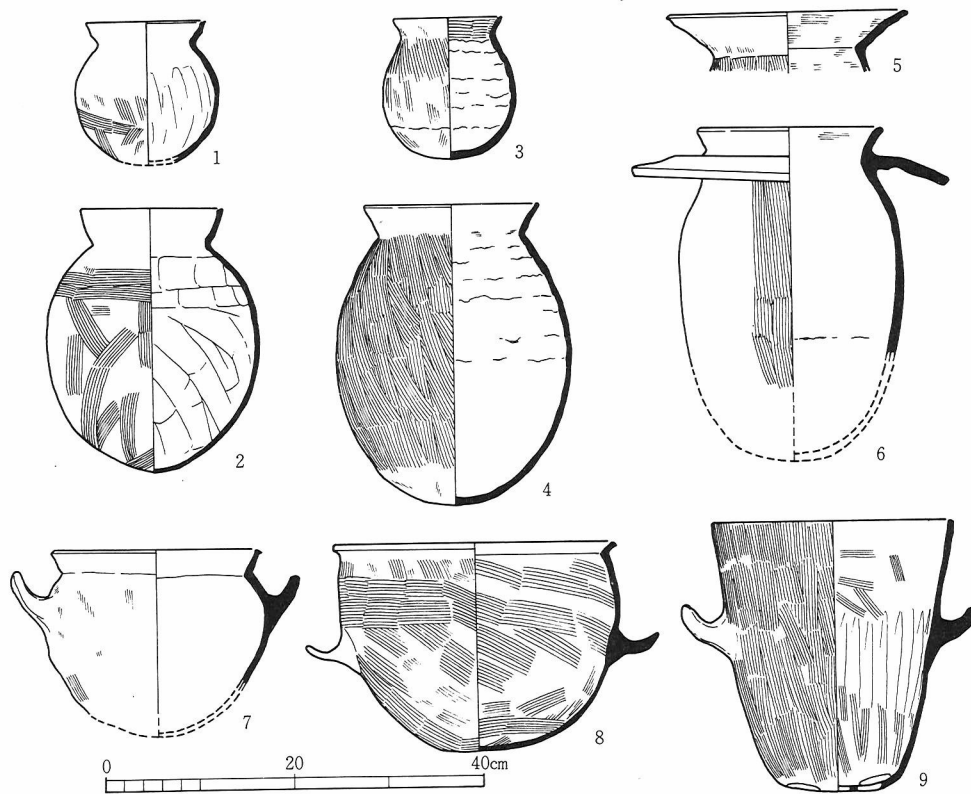
以上のように、須恵器出現期前後の時期には、従来から存在していた布留式土器の伝統を受け継ぐ土師器群・須恵器出現期前後に新たに成立する土師器群・韓式系土器群・須恵器さらに、朝鮮半島からの直接的な舶載品等の様々な系譜を持つ土器群の存在を考えることができる。前三者は、前述したように個々には、それぞれ一定の研究成果を持つてはいるが、ほぼ同時期に存在していた、三者の相互関連について述べられていることは少ない。この問題について、まず、三土器群の煮沸用土器の器種構成、器種の消長、各器種の形態・製作技法・法量・使用痕の特徴について、各土器群個々を整理・検討し、その後相互関連について考察してみる。

## Ⅱ 布留式系土器

現在、布留式土器の出現と終末については、布留式土器をいかに把握するかによって議論が別れている。今回、特に問題となるのは、その終末に対する考え方である。これについては、都出比呂志・原口正三が提唱している如く、布留式土器を須恵器が出現するまでのもの限定してゆく立場をとることにする。<sup>(8)</sup>そして、須恵器出現以降で、布留式土器の伝統を持つ土器を布留式系土器と呼ぶことにしたい。

布留式系土器に属する煮沸用土器には、甕A・Bがある。甕A（第1図—2）は、丸底の底部に球形からやや長めの形態をとる体部をもつ。口縁部は内彎気味に外上方へ開き、端部で内傾する広い平坦面を構成するものである。甕B（第1図—1）は、甕Aを小型にしたものである。このような形態的特徴を持つ布留式系甕は、大阪府船橋遺跡・豊中、古池遺跡・奈良県平城宮下層S D881等の例では、TK208型式前後までは確実に継続する。<sup>(9)</sup><sup>(10)</sup>

布留式系甕の製作手法のうち、まず成形法について検討すると、田中琢は、かつて布留式土器の成形を「型の手法」で製作していると論述しており、最近では井上和人もこれを首肯し、より具体的に製作工程を復原している。<sup>(11)</sup>また、西弘海は、大型の壺や甕は、底部を内面から押し出して丸底にする「押し出し丸底」という方法がとられたと述べている。<sup>(12)</sup>一方、川西宏幸は、器壁断面の彎曲や調整方向等に注目して、「布留式甕は、巻き上げ → 調整を三回反復しているとの論考を提示している。」<sup>(13)</sup>このように布留式土器の成形法については、種々の論述があり、それ

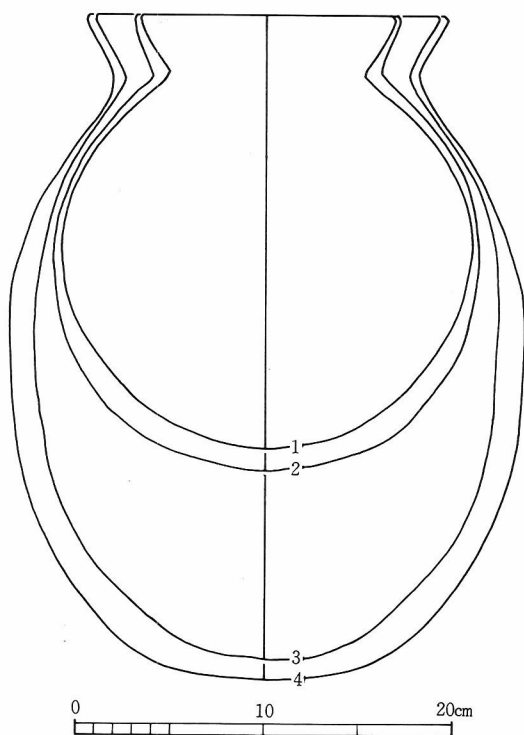


第1図 須恵器出現期の煮沸用土器

それぞれに問題点も含んでいる。<sup>(16)</sup> 布留式系甕A・Bの成形法は、前述した布留式土器の成形法に対する諸論や後述する須恵器出現後に新たに成立する土師器の成形法などから考えて、川西の論考が最も妥当な見解と思われる。布留式系甕の調整法は、体部外面に縦方向からやや左上がりのハケメ調整で仕上げるのを原則とし、体部上半に横方向のハケメを再度加えたり、底部に横方向のハケメを加えて調整するものもある。体部内面は縦方向にヘラケズリ調整し、器壁を薄く仕上げている。口縁部は、内外面とも丁寧なヨコナデ調整を施している。

次に法量関係について検討することにする。(第2図) 法量を示した資料は、布留式甕(1)、布留式系甕A(2)・韓式系土器甕C(3)・土師器甕C<sub>1</sub>(4)で、それぞれ対象とした資料数は不揃いであるが、<sup>(17)</sup> 各々について口径・器高・最大径の高さ・頸部径・体部高の平均値を表示した。布留式甕の法量関係については、小若江北式の段階に属するものを提示した。小若江北式甕と布留式系甕Aを比較すると、布留式系甕は、各要素とも全体に若干大型化する傾向が看取でき、体部高のみの著しい長胴化傾向は認められない。一方、韓式系土器甕C・土師器甕C<sub>1</sub>の法量関係とは、両者とも大きく相違する。

使用痕については、主に煮沸用甕の外表面に認められる煤化部分や二次的加熱による赤色化



第2図 煮沸用土器法量模式図

	1	2	3	4
口 径	13.4	14.1	18.1	19.0
器 高	22.9	24.1	35.2	34.2
最 大 径	21.7	22.4	27.2	24.5
最大径の高	11.0	11.9	20.0	18.1
頸 部 径	10.4	12.4	15.2	16.4
体 部 高	20.2	20.9	32.0	31.0

1. 小若江北式甕  
2. 布留式系甕  
3. 韓式系土器甕C  
4. 土師器甕C<sub>1</sub>  
(単位 cm)

第1表 煮沸用土器法量

部分の観察を行うことにした。布留式甕・布留式系甕については、今回実物を観察できたものは極く少数であったので、すでに西川卓志が公表している観察結果を参考とした。<sup>(18)</sup>それによると、底部全体から体部最大径やや上位までに煤化した部分が認められるが、赤色化した部分は、存在しないとされている。(図版7—1、2)

### Ⅲ 韓式系土器

既述した布留式土器から出現してくる土器群ではなく、朝鮮半島で用いられていた叩き技法によって製作したもので、在地の粘土を使用して酸化焰焼成した土器群である。須恵器出現期頃に多量に出土するようになるもので、主に畿内及びその周辺地域を中心に分布することが明らかにされているが、近年、愛知県四段畑遺跡、京都府曾我谷遺跡、岡山県百間川遺跡などでも出土例が見られるようになり、今後、各地で若干の資料増加は期待できるが、畿内地域を中心に分布する傾向はかわらないであろう。なお、韓式系土器とされる製品のなかには、在地で製作されたもの以外に、朝鮮半島からの直接的な舶載品も存在するものと考えられる。製作技法や胎土分析による、半島の製品とのより詳細な比較検討が必要である。

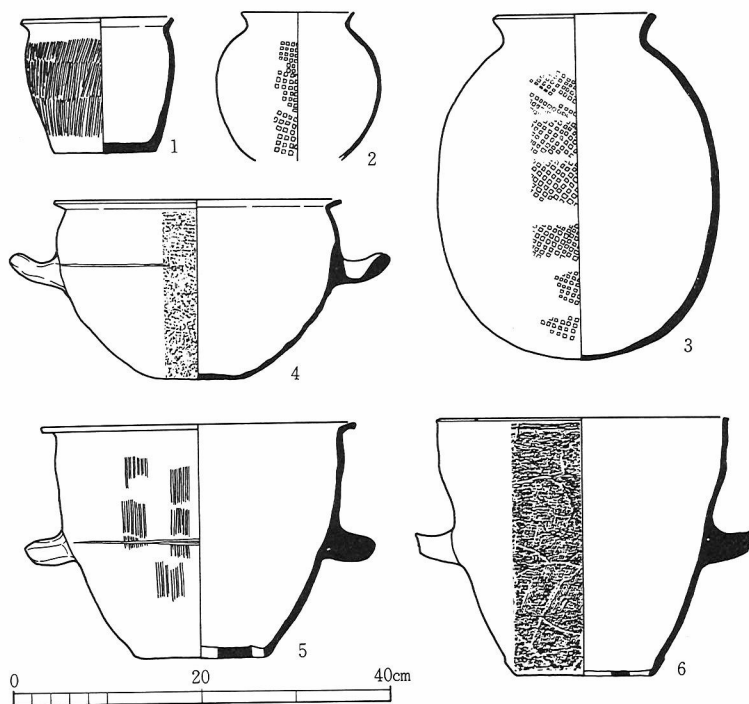
韓式系土器の煮沸用土器には、甕A・B・C、甗A・B、鍋等が認められる。(第3図) 甕



A(1)は、平底の底部から外上方に開く体部に続き、口縁部が短かく外反し、端部に面をもつ小型品である。甕B(2)は、丸底の底部に球形の体部を持ち、口縁部を短かく外反させる小型品である。口縁端部の形態によって、さらに細分可能である。甕C(3)は、丸底の底部から長胴の体部に続き、口縁部は鋭く外反し、端部で面を持つ大型品である。甕は、平底の底部から外上方へ開く体部を持つ。体部中央からやや下位には、一対の牛角形の把手を有する。口縁部には、短く外反するものA(5)と、体部からそのまま立ち上がり面を構成するものB(6)がある。甕A・Bの底部には、蒸気孔を焼成前に、6孔前後の円形、楕円形、三角形、又はこれらを組み合わせた状態で穿孔している。このような韓式系土器の甕と同一形態をとるものが初期須恵器のなかに見出すことができ、須恵器と韓式系土器の相互関連や系譜関係を検討するうえで、注目すべき土器である。<sup>23</sup>鍋(4)は、丸底の底部から半球形の形態を呈する体部に続く。体部には、甕と同様の牛角形把手一対が付く。口縁部は鋭く外反し、端部を四角くおさめている。また、口縁部を片口状に仕上げたものも存在する。これらのうち、甕Aについては、体部外面に二次焼成痕や煤の付着する例があるため、ここでは甕としたが、煮沸用器としての使用痕がまったく認められず、初期須恵器のなかにも同一形態の製品が存在することから、本来は、煮沸用の機能を持つのではなく、鉢と考えることも可能である。

次に韓式系土器の製作技法を検討してみよう。成形法については、粘土紐の継ぎ目を観察できるものは少ないが、米田文孝が指摘しているように、原則として粘土紐巻き上げによって成形するものと考えられ

<sup>24</sup>る。そして、器体外面のタタキメの方向が、ある箇所で一線画して大きく相違する部位があることから、粘土紐巻き上げと調整の工程を繰り返すことによって、全体を製作していると考えられる。タタキメには、平行・正格子・斜格子・縄蓆文などがある。内面の当て具痕は、同心円状を呈するが、そのほとんどが丁寧にナデ消されている。調整法には、ハケメ調整・ケズリ調



第3図 韓式系土器

整・ナデ調整などがある。ハケメ調整は、タタキ成形後、甕A・C等の頸部外面に局部的に加えることがある。ケズリ調整は、平底の底部をもつ甕A・甕A・Bの底部外面に認められるものがある。ケズリ調整は、タタキ成形後、横方向に施されるのが一般的である。内面調整にケズリ調整を加えるものも土師ノ里遺跡出土甕Aなどに存在する。<sup>(25)</sup>

次に韓式系土器甕Cの法量関係は、布留式系甕Aと比較した場合、すべての要素が著しく大型化しており、特に口径、器高、最大径には顕著な相違がある。このような両者の著しい法量的差異は、使用法・機能等に起因する、それぞれの系譜の相違によるものではないだろうか。(第2図・3)

二次焼成痕や煤の付着状態による使用痕を観察してみると、良好な資料が少ないが、大阪府北島池遺跡出土の韓式系土器甕C例では、丸底の底部外面の径約8cmには、煤はほとんど付着しておらず、その上方の体部全体に煤が明瞭に認められる。二次的加熱によって赤色化した部位については、器体にはまったく認められない。(図版8—5)

各遺跡での、韓式系土器の出土状況は、包含層内で多量の須恵器・土師器などと共に、小破片化したものが、微量に認められる場合が大多数で、良好な状態は少ない。しかし、大阪府芝ヶ丘遺跡<sup>(27)</sup>・長原遺跡<sup>(28)</sup>・滋賀県南市東遺跡等<sup>(29)</sup>では井戸や竪穴住居内から比較的良好な状況で検出されている。これらの出土例では、初期須恵器と共伴している例も多く、日本で須恵器生産が開始されるのと同時間ないしは、その直後には確実に存在し、6世紀前半頃までは継続的に認められる。さらに、大阪府一須賀11号墳・27号墳<sup>(30)</sup>、愛宕塚古墳等<sup>(31)</sup>の6世紀前半以降に築造された古墳から甕Aが出土する例もあるが、大半の韓式系土器群は、ほぼ6世紀前半以降は消失してゆく。

#### IV 土師器

須恵器生産開始期以降、新たに認められる土師器群を取り扱う。煮沸用土器には、甕B・C甕A・B、鍋A・B、羽釜、移動式カマド等がある(第1図)。甕B(3)は、丸底の底部に球形の体部が付き、口縁部が短かく外反気味に立つ中小型のものである。甕Cは、丸底の底部から長胴の体部に至る。口縁部は外反し、端部に面を持つものである。さらに甕Cは、口径が体部最大径よりも小さいものC<sub>1</sub>(4)と、口縁部が著しく発達し、体部最大径をしのぐものC<sub>2</sub>(5)に細分できる。甕には韓式系土器の甕と同様に、平底の底部から外上方へ開く体部に続き、体部中央には一対の把手を持つ形態を呈する。口縁部には、短く外反するもの(A)と、体部からそのまま立ち上がり面を持っておさめるもの(B)(9)がある。なお、甕Bのうちには、底部が丸底の形態をとるものが、大阪府八尾南遺跡等で認められる<sup>(32)</sup>。鍋A(8)は、丸底の底部に、肩の張りを持たない体部を持ち、口径が体部最大径よりも大きいものである。鍋B(7)は、丸底の底部に、やや肩の張る扁球形の体部に続き、体部最大径が口径をしのぐものである。羽釜(6)は、器体については甕C<sub>1</sub>とほぼ同様の形態を呈し、頸部に、やや下方へ傾く長い鰐が付く。移動式カマドは、焚口の周縁に粘土を貼り付けて、小さく突出する庇としたもので、体部中央には、一対の

下向きの角状把手が付く。

さて、次に煮沸用土師器の製作手法・法量関係・使用痕について検討してみる。成形法は、器体内面に粘土紐の継ぎ目が明瞭に残存することから、粘土紐を巻き上げることによって成形することは明らかである。器体内外面の調整法は、各器形を通して、ナデ調整・ヨコナデ調整・ハケメ調整・ヘラケズリ調整が認められ、一調整法で仕上げる場合や、二種類以上の調整法を重複して施す場合もある。体部外面調整の主要な技法は、ハケメ調整である。ハケメは全体に粗く、その方向は、ほぼ縦位をとるが、一部底部に縦方向のハケメ調整後、横方向のハケメを加えることもある。また、口縁部を外反させる際に、口縁部内外面にハケメ調整を施す場合もある。このほかに、体部外面全体をナデ調整のみで仕上げる例もある。内面調整には、ハケメ調整・ナデ調整・ヘラケズリ調整等があり、布留式系甕がヘラケズリ調整のみで仕上げられていたのに比し、様々な調整法が存在する。

土師器甕C<sub>1</sub>の法量関係は、韓式系土器甕Cの数値と近似しており、布留式甕・布留式系甕Aとは著しい差違がある。(第2図)

土師器甕C<sub>1</sub>の煤の付着状態を観察すると、煤は体部下半から体部上半に認められるが、体部下半から体部最大径付近までに特に顕著に付着している。しかし、底部周辺の直径約7cm程度には、煤の付着はほとんどない。このような様相は、甕Bについても認められる。(図版8-4)

次に、各器形の消長を検討すると、甕は、船橋遺跡において須恵器出現時にあたる0Ⅱ段階で既に存在し、以後6～7・8世紀に継続してゆく。甕のうち、主流を占めるのは甕Bで、甕Aは、ほぼ6世紀前半頃には衰退し、以降ほとんど消失する。長胴の甕Cは、船橋遺跡では0Ⅲに出現するとされている。しかし甕との組み合わせから考えて、甕と同様に0Ⅱ段階に既に出現している蓋然性は極めて高い。そして、甕Bとともに6～7・8世紀にかけての煮沸用甕の主流となる。鍋A・Bは、船橋遺跡において0Ⅲ段階に認められる。しかし、甕・甕B、Cなどと伴に、0Ⅱ段階に出現している可能性もある。鍋Aは盛行せず、甕Aと同様に6世紀前半頃には消失してゆく。一方鍋Bは、6世紀以降も継続的に展開してゆく。羽釜は、5世紀末頃の製品として大阪府猪ノ木塚古墳出土例が存在するが、この時期に属する他の出土例は極めて少ない。<sup>(33)</sup>羽釜は前述した器種と同様に7～8世紀以降まで存続してゆく。移動式カマドは、大阪府岡山南遺跡出土製品が5世紀後半に属し、管見では最古例と考えられる。<sup>(34)</sup>これ以降、大阪府一須賀6号墳<sup>(35)</sup>・和歌山県船戸山3号墳出土<sup>(36)</sup>のミニチュア炊飯具セット等からも明らかなように、甕C<sub>2</sub>・羽釜・甕などとセットを構成して7～8世紀へと継続してゆく。

## V 整理

以上、須恵器出現期に存在した、布留式系土器群・韓式系土器群・土師器の煮沸用土器について、各観点にわたって個々に観察してきた。以下では、前述してきた各視点を中心に、同時期に存在していた三者の相互関連について検討してみたい。

まず、煮沸用土器の器種構成であるが、従来の布留式土器の延長線上にある、布留式系土器

は、甕A・Bのみで構成され、前段階と同様の内容となっている。一方、韓式系土器群には、甕A・B・C、甗A・B、鍋などがあり、煮沸用土器が多様化している。これらの土器群は、その系譜を朝鮮半島に求めることのできるもので、日本の伝統的な布留式土器の内から出現してきたものではない。須恵器出現期頃に新たに出現する土師器には、甕B・C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>、甗A・B、鍋A・B、羽釜、移動式カマド等の器種がある。これらの器種のほとんどは、韓式系土器と同様の構成であり、土師器の新たな器種が、布留式土器から発展的に出現したものではなく、韓式系土器群の影響によって成立したものと考えたい。ただし、甕C<sub>2</sub>、羽釜、移動式カマドは、現在までに出土している韓式系土器群のなかには確認できない<sup>37)</sup>。

製作手法のうち、成形法は、三土器群とも原則として、粘土紐巻き上げと調整の工程を何度か繰り返すことによって成形している。調整法として、体部外面調整は、布留式系甕・須恵器出現後の土師器群の各器種は、基本的には、ハケメ調整を施し、器表面を整えている。この調整法は、布留式土器にも一般的に認められ、須恵器出現期以降の煮沸用土器にも、布留式土器と同一の伝統的な手法によって調整されている。体部内面調整法は、布留式系甕では、ヘラケズリ調整によって器壁を薄く仕上げているが、新たな煮沸用土師器群では、ナデ調整、ハケメ調整、ヘラケズリ調整等の様々な手法があり、器壁が布留式系甕に比し、若干厚手となる。これら種々の内面調整法を、さらに詳細に検討してゆけば、この時期の土師器の地域性を見出すことも可能ではないだろうか<sup>38)</sup>。一方、同時期に共存する韓式系土器群の体部外面は、平行、正格子、斜格子、縄蓆文のタタキメによって仕上げられている。内面調整は、丁寧なナデ調整を加えるが、同心円状を呈する当て具痕が残存しているものもある。このような調整法は、5世紀中頃に導入された、須恵器の製作技法と同一の手法であり、布留式土器とは、別系統の技術である。

法量関係については、各土器群のなかの煮沸用土器のうち、最も普遍的で大型の器種について比較してみた。その結果は、布留式甕（小若江北式期）から須恵器出現後の布留式系甕は、口径・器高・頸部径・体部高等が全体として若干大型化する傾向が認められるが、従来論述されているような体部のみが著しく長胴化する現象については、看手できない。これに対して、韓式系土器甕Cと土師器甕C<sub>1</sub>とは、各要素とも、法量が近似している。さらに、布留式系甕Aと比較した場合、いずれの要素も大型で、著しい差違がある。したがって法量関係より考えると、土師器C<sub>1</sub>は、布留式系甕Aが長胴化して成立したとするよりも、韓式系土器甕Cの法量を短期間に模倣して出現したものと考えたい。このようなことは、甗・鍋等の他の器種についても同様のことがいえる。

使用痕の検討として、器体に残る煤の付着状況と二次焼成痕と考えられる赤色化部分について観察を試みた。その結果、布留式甕及びその系譜を引く布留式系甕と、韓式系土器群・新たな煮沸用土師器群とでは、煤の付着位置に若干差異があることが指摘できた。前者では、煤の付着範囲が、底部から体部最大径の位置までの全体に認められるのに対して、後者では、底部から、体部最大径までに特に多く付着するが、底面の径約8cmの範囲には、ほとんど煤は付着

していない。また、赤色化した顕著な二次焼成痕の認められる部位は、まったく存在しない。このような状況は、甕を使用する際に、直立した器体の底部が地上に接置しているか、もしくは、現在までのところ、非常に出土例が少ないが、煮沸の際に甕全体を底部の一ヶ所で支持する土製支脚や、高杯・甕等の器体の一部を打ち欠いたものを再利用した転用支脚、石を利用した支脚等の使用状況を想定できるのではないだろうか。<sup>39)</sup>

最後に、各器種の消長については、5世紀中頃の布留式土器の製作、使用時に、日本において須恵器生産が開始されはじめる。これと同時ないしは、その直後には、韓式系土器の各器種及び、土師器甕B・C、甗A・B、鍋A・B等の新たな器種が出現する。また、布留式土器の伝統を引く布留式系甕もなお存在している。その後、5世紀末から6世紀前半頃には、布留式系甕・韓式系土器群は、激減または消失する。土師器群では、甕C<sub>2</sub>、羽釜、移動式カマド等が新たに加わる一方で、甗A、鍋Aは盛行することなく消滅し、この段階で、6世紀後半以降に継続してゆく煮沸用土師器群のセットが確立する。つまり、韓式系土器群と同様の器種構成で成立した煮沸用土師器群が、次第に日本化し、煮沸用土器が定型化した段階といえる。

このように、須恵器出現期頃に成立する煮沸用土器は、その器種構成や形態的・法量的特徴、さらに使用法等については、布留式土器から発達したものと考えよりも、渡来系人によって導入された韓式系土器群に属する煮沸用土器を短期間に模倣することによって出現するものと考えることができる。しかし、その製作技法は、基本的には、従来の布留式土器製作に用いられた手法が採用された。したがって、須恵器出現期以降の土師器は、製作技法的には、布留式土器の延長線上で理解できるものの、器種構成、形態、法量、使用法等については、韓式系土器群の影響を極めて強く受け、これを祖型として成立し、5世紀末頃に須恵器が定型化し日本化するのと同様に、以降の基本的な煮沸用土器のセットとして確立してゆく。

## VI 結語

さて最後にこのような土師器の成立した要因とその背景について若干の検討を加えたい。5世紀後半には、新たな土師器群の成立とともに、造付カマドの採用という厨房の変化がある。<sup>40)</sup> 造付カマドは、調理専用の機能をもち、熱をカマド内に閉じ込めるため、炉と比較した場合、熱効率は極めて優れていたものと推定できる。造付カマドは、大阪府土師の里遺跡<sup>41)</sup>、和歌山県田屋遺跡<sup>42)</sup>、滋賀県南市東遺跡<sup>43)</sup>等の5世紀中頃の竪穴住居址で、韓式系土器などと共に検出されており、以後5世紀末頃から6世紀前半には、急速に全国各地に波及している。これらの諸例のうち、造付カマドの全形を知り得る例は、ほとんど存在しないが、しばしば造付カマドに、土師器甕C、甗等が掛けられたままの状況で崩壊した例が検出されており、新たに出現した煮沸用土師器群が造付カマドを利用して用いられたことが明らかになっている。<sup>44)</sup> したがって煮沸用土師器は、当然カマドの構造や規模等によって、形態・法量・使用法等の上で大きな規制を受けることになる。つまり、布留式土器の伝統の上からでは理解できない、新たな煮沸用土師器群の形態・法量・使用法等の特徴は、韓式系土器群を単に模倣して出現したといえるのみな

らず、同一時期に認められる造付カマドの採用と普及によって規定され成立したものと考え得る。造付カマドの出現と普及によって従来使用していた煮沸用土器が大きく変質するような動向は、畿内地域のみならず、東海地方以東でも、S字状口縁をもつ台付甕が5世紀末から6世紀前半に激減しており、同様の様相を看手できる。<sup>(45)</sup>このように、5世紀後半には、須恵器をはじめ馬具、武具等の新たな文物や諸技術の導入と日本での定型化という現象が認められる。さらに造付カマドの使用による厨房の変化や、墓制の上でも横穴式石室の採用など生活様式全般にわたる様々な変革がある。これらの動態は、朝鮮半島からの新たな文物や技術等を携えた、渡来系氏族の関与なしには考えられない変貌であり、彼らの及ぼした影響は多大なものであった。そして5世紀末から6世紀前半には、須恵器の地方窯の成立などに認められるように、新たな生活様式全般が急速に各地へ波及してゆく。

## 注

- (1) 坪井清足 1956年『高島王泊遺跡』
- (2) 横山浩一 1961年「手工業生産の発展・土師器と須恵器」『世界考古学大系日本Ⅲ』
- (3) 佐原真、田中琢、田辺昭三、原口正三 1962年『船橋Ⅰ・Ⅱ』平安学園考古学クラブ
- (4) 木下正史・安達厚三 1974年「飛鳥地域の古式土師器」『考古学雑誌60巻第2号』
- (5) 木原克司・田中清美 1980年「布留式終末期の土器」『瓜破北遺跡』大阪市文化財協会
- (6) 原口正三 1979年「須恵器と土師器」『日本の原始美術4 須恵器』
- (7) 阿部嗣治 1980年「東大阪市出土の漢式系土器について」『東大阪市遺跡保護調査会年報 1979年度』東大阪市遺跡保護調査会  
これ以後、堅田直・福岡澄男等によって精力的に研究されている。なお、韓式系土器については、研究者によって様々な呼称・定義されているが、今回は堅田氏の見解に従う。
- (8) 都出比呂志 1979年「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究第26巻第3号』
- (9) 前載注(3)
- (10) 芋本隆裕 1976年「上池部分出土土器の考察」『豊中・古池遺跡発掘調査概報そのⅢ』豊中・古池遺跡調査会
- (11) 奈良国立文化財研究所 1975年「平城京左京三条二坊」『奈良国立文化財研究所学報第25冊』
- (12) 田中琢 1967年「古代・中世における手工業の発達1 窯業(4)畿内」『日本の考古学Ⅵ歴史時代上』
- (13) 井上和人 1983年「布留式土器の再検討」『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集・文化財論叢』
- (14) 西弘海 1981年「西日本の土師器」『世界陶磁全集2・日本古代』
- (15) 川西宏幸 1982年「形容詞を持たぬ土器」『考古学論考、小林行雄博士古稀記念論文集』
- (16) 各論考によって、成形することは可能ではあるが、「型の手法」については、型そのものがまだ未検出であり、さらに考慮すべきであろう。また川西氏の論考では、体部内面に明瞭に認められる指押え痕について十分な説明がなされていない。
- (17) 各計測値は、報告書の実測図・観察表を利用した。また、最大径の高さ、体部高については、それぞれ底部からの高さを計測した。なお、使用した資料を以下に示す。  
小若江北式期（小若江北遺跡）  
布留式系甕A（船橋遺跡・瓜破北遺跡、豊中・古池遺跡）  
韓式系土器甕C（芝ヶ丘遺跡、大園遺跡、音浦遺跡）

土師器甕C<sub>1</sub>（鬼塚遺跡・神並遺跡・岡山南遺跡・八尾南遺跡・長原遺跡）

- (18) 西川卓志 1981年「弥生時代甕形土器の外表面観察—東大阪市域出土資料を中心に」『調査会ニュース18』
- (19) 豎田直 1982年「韓半島伝来の叩目文土器（韓式系土器）について」『帝塚山考古学研究所設立記念、日韓古代文化の流れ』
- (20) 丹羽博 1983年「四段畑遺跡」『甚目寺町文化財調査報告Ⅰ』甚目寺町教育委員会
- (21) 奥村清一郎、西岡巧次 1977年『曾我谷遺跡発掘調査概報』園部町埋蔵文化財調査報告書第2集 園部町教育委員会
- (22) 阿部嗣治氏の御教示による
- (23) 須恵器甕Aの例としてTK85号窯等がある。
- (24) 福岡澄男 1978年「一須賀古墳群の外來系土器」『摂河泉文化資料3巻第2号』
- (25) 東大阪市文化財協会英田分室にて実見した。
- (26) 米田文孝 1982年「所謂漢韓系式土器の一例」『阡陵、関西大学博物館学課程創設20周年記念特集』
- (27) 大阪府文化財センター 大井分室にて実見させていただいた。
- (28) 阿部嗣治・上野利明 1981年「北鳥池遺跡・池島遺跡発掘調査概報」『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集1980年度』東大阪市遺跡保護調査会
- (29) 前載注(7)
- (30) 大阪市文化財協会 1983年「大阪市土地開発公社川辺市営住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査の現地説明会資料」
- (31) 中江彰 1979年『南市東遺跡発掘調査概報』安曇川町教育委員会。
- (32) 米田敏幸 1981年『八尾南遺跡』八尾南遺跡調査会
- (33) 荻田昭次 1977年「古墳時代の遺跡、猪ノ木古墳」『河内四條史第二冊・史料編Ⅰ』
- (34) 瀬川芳則、中尾芳治 1983年『日本の古代遺跡11・大阪中部』
- (35) 大阪府教育委員会 1969年「河南町東山所在遺跡発掘調査概報」『大阪府文化財調査概要1968年』
- (36) 吉田宣夫 1977年「ミニチュアカマドを出土した船戸山古墳群」『月刊文化財167号』
- (37) 最近、東大阪市文化財協会が実施している神並遺跡4次調査において、縄蓆文を施した移動式カマドが出土しており注目される。現在までに土師器の器種のうちで韓式系土器のなかに認められない、甕C<sub>2</sub>・羽釜等の器種についても将来的には検出される可能性は大きいものと想定できる。
- (38) 肉眼的観察ではあるが、生駒西麓の胎土で製作された甕類の内面調整は、雑なナデ調整が施されるのみで粘土紐の継ぎ目が明瞭に残存するものが多数ある。一方、大和の発志院遺跡では、ヘラケズリ調整するものが主体を占めるようである。
- (39) この時期の土製支脚の例として、大阪府土師ノ里遺跡、鬼塚遺跡、奈良県発志院遺跡などで検出されている。また転用支脚の例は、時期が異なるものの京都府中臣遺跡等の住居址の造付カマド内から認められる。
- (40) 須恵器出現以前の造付カマドとして、大阪府四ツ池遺跡、福岡県西新町遺跡等の報告例があるものの、極く限られたものである。また、当然これと組み合わせて使用する煮沸用土器に対する考察も展開されておらず、再考の余地がある。
- (41) 泉本知秀他 1978年『国府遺跡発掘調査概要Ⅶ』大阪府教育委員会
- (42) 武内雅人氏の御教示による。
- (43) 前載注(29)
- (44) 京都府中臣遺跡、静岡県伊場遺跡、群馬県正観寺遺跡などに例がある。
- (45) 前載注(4)

## 追記

筆者の研究会での発表以降、福岡澄男氏は第1回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会において、「近畿地方における三国時代朝鮮系土器の流入とその影響」と題して研究発表を行っている。福岡氏の発表主旨は、三国時代朝鮮系土器（韓式系土器）の年代的な位置付け・地理的分布傾向と遺跡での出土傾向の把握・土師器変容とのかかわりについてであった。これらの問題点の設定とその解釈は、本稿とほぼ同一見解であった。また、植野浩三氏は「韓式系土器についての予察」において、韓式系土器の概念規定および韓式系土器とその出土遺跡の検討を通して5世紀代を中心とする渡来人の役割について論及している。

なお、研究会発表の機会に四條畷市教育委員会野島稔氏・天理参考館置田雅昭氏・大阪市文化財協会田中清美氏・和歌山県文化財連盟武内雅人氏をはじめ多数の方々から出土遺物見学の際に様々な御教示・御助言を頂いた。文末ながら記して感謝の意をあらわします。